

風の詩

ヒアシンスハウスの会 資料



第12号目次
 (1)ヒアシンスハウスを語る(佐野哲史) / (2)ヒアシンスハウス
 去年今年(北原立木) / (3)ハウスガイドの「話の種」(三浦
 清史)、ロープアートの魅力(田中美千代) / (4)ペンの代わ
 りに映像で(富田宏)、ヒアシンスハウスで夢が生まれる(吉
 里睦子)・会計報告・編集後記

ヒアシンスハウスの十五年を語る

佐野 哲史

ヒアシンスハウスの活動の発起人、会の運営委員、ハウスガイド(計十名)から、個別に聞いた内容を一つに再構成したものです。(事実とはやや異なると思われる内容や推測も含まれます。)

● ヒアシンスハウスを建てる

北原 それをさかのぼると平成元年に始まるんだよ。堀多恵子さんといつて、堀辰雄の奥さん。追分に住んでおられて浦和に来て下さるというんで、僕は大宮までお迎えに行つてね。別所沼まで来て。それで、沼を見て、第一声が何かつていうと、「あ、ここに立原道造が住みたいと思ったのね。」って。

坂本 発端っていうのは、図面が残つてたと、不完全とはいえない。スケッチとはいえない。

北原 そこから活動が始まったんだ。その一枚の設計図なんだよ。

坂本 屋根の色とか、図面っていうか建築の資料にそこまであったから。(…細かくこだわってるじゃない。さり気なく建ててはあるけど。

中島 なんか、小さな全てが詰まった、夢が詰まった空間だなと。

● 夢に終わるのいいじゃないか、始めてみよう

山中 永峰さんが僕のところにある時やつて来て、「山中君、ヒアシンスハウスって知ってる？」って感じで訊いたんですよ。当然僕は知らなかったんだけど。彼は、(設計事務所の)仕事としてではなくて個人的に市民の力で建てたいんだって言ったのね。その時に確か、「自分の後半の人生の中で、若い人が抱いた夢を実現するっていうことに力を尽くしたい。」っていうことを言ったの。

中村 山中さんと永峰さんが美術館(埼玉県立近代美術館)

に私を訪ねて来られて、こういうものをなんとかしたいんだけど、なんか良い方法はないだろうか、みたいなですね、ご相談に来られたんですね。

山中 建築家仲間だけでやつても、あまり賛同を得られないんじゃないかって思ってた。(…立原道造は建築家であつたと同時に、それ以上に詩人であつたり、絵も上手かつたでしょ。(…文芸関係の人たちが一緒だつたら上手くいくんじゃないかと思つて、中村さんに誰かいないか相談したんだと思つた。

中村 じゃあ坂本さんに声をかけてということ。坂本さんが、それを一生懸命動いていた北原さんと一緒に、美術館で一遍みんなで話を聞きましようみたいなこと。

坂本 美術館で五人が会つたんです。

山中 初対面だから、彼らも胡散臭い連中が胡散臭い話をしに来たんじゃないかっていうような目で…。

坂本 いや、なんか、みんなほんとにできんのかなつていう。疑心暗鬼なの。みんなすごい不安げなわけですよ。

山中 暫くして、その五人が北原さんの家に集まつて、奥さんが小料理を作つてくれて、酒を飲みながら色々な話をして、そこで盛り上がったような気がするんだよ。それで本当にやろうということになって。

北原 最初はねえ、僕らの中でこう言つたんだ、立原道造が夢に終わった建物なんだから、僕らが夢に終わるのはそりゃあ当たり前かもしれない。夢に終わるのでもいいんじゃないかとね。その気楽さみたいなのがよかつたのかな。

● 市民が熱望するのあれば

山中 さいたま市の公園課にその五人でお願いに行つたんですよ。こういうことがあるんで、ちょっと敷地を貸して建てさせてくれ、というようなことを言つたら、「とんでもない!」ということ。「そんなことをしたら公園じゅうが訳の

分からないことになつちゃうよ」と。僕の記憶では、一言、「ただし市民がそれを熱望するのであればまた考えるけどね」みたいなことで追返されたのね。

北原 僕は新聞に書いて。こういうのやるんだって。つまり、立原道造の紹介みたいなのをすいぶん書いた。それはアピールしたよね。(…)始まつてみると、みんなの関心が大きいから、何とかなるんじゃないかという手ごたえがあり。で、土地を。まあもちろんその前からね。だいたい市役所行つたよ。公園緑地課、それから市長、それから助役さん。

山中 そうしてその時に別所沼会館でヒアシンスハウスをつくる集いつていうのをやつたんだよ。それで講演を、鈴木博之さんに頼んで。(…)道造記念館の媒体でチラシを撒いてもらつたら当日立ち見が出るくらい人が集まつて。

● 建設に向けて

北原 それで、発起人を集めて。二十何名か。で、僕が文章を書いたんだ。文章はねえ、インパクトあつたと思う、僕は。その最初の気持ちをだいたいにしたと思った。

中村 でまあ、要はお金集めというのが重要なところなんですけれども、基本的には寄付を募ると。(…)中村真一郎さんとか大岡信さんとかですね、全国的にも知名度がある作家の方、詩人の方とかに加わつていただいて。この人が言うなら手伝うか、寄付するか、みたいな。それで資金集めをしたというのが一年半くらいですかね。

北原 それがなかなかね、そうすると、金が集まってくるわけなんだよ。びつくりしちやつてね。(…)ヒアシンスハウスを作るには六百万かかる、そうすると募金を始めると、それ以上のものが集まる。市のほうも、そういう様子を見て、これは嘘じゃないなあという。これだけ金が集まつて、これだけ進んでるのかつていうんで、最後の方の、土地を借りるとか、いろんな付帯条件はね、上手くいったと思う。

佐野 もし借りられなかったら、どうしてたんですかね…
 北原 どうしたんかね(笑)。だから、それはね、僕は、おおよけには出せないところなんだよね。だから、まあ(募金活動と市との交渉を)並行していくような形だね。そのへんところがね、僕らにしてみればね、かなり絶妙に、動いたと思っ
 ているんです。

中村 九〇年代後半以降ですけれども、直営施設の委託とか民営化とかが指定管理者を含めて進んでいって、公園管理事務所を県から市に下ろすとかね。市から民間に下ろすとかつていう。(…)民間の力を活用したいという。そういうものにちょうどタイミングとして合ったということだったんじゃないですかね。

北原 まあ、歴然とした、こうやれば上手くいくとか、そういうのが殆ど無いまま進んだんだよ、これは。

● 出てきてみて驚いた

永峰 出来上がった時は本当にちよつとびっくりしましたね。

登 やつぱり、(立原が意図したことは実験的に建てようということなんだろうね。なるべく生活臭を廃して上田秋成の「鞆居」や宮本武蔵の「靈巖洞」のように三度の食事を外から運び込むのが理想だったようです。

山中 立原の設計のスケッチを見るのと、出来てみて実際に空間を体験するとの間では、やつぱりギャップがありましたよね。実際にできて中に入って、ああそうだったのかつていうのが納得できたつていう気がします。

津村 作んなかったら分かんなかった。絵だけじゃ分かんなかったね。

北原 やつぱりねえ、ここにいると、立原道造が現れる気がするよ、ひよこりとなね。特にね、雨で、人の通らない日は。そういう空気がある。あのマントを着てね。来る気がする。

● 十五年の時を経て

坂本 やつぱり、愛着がありますよね。ハウスそのものに対して。

津村 今の方がいいと思う。やつぱり杉板は経年してこそなのかな。

三浦 この窓台に花が飾ってあるでしょ。出来たての頃は素

木にその植木鉢の跡が残ったりして、なんてことをするんだつて思ったけど、日差しで杉が焼けてこのくらい経年の味がついてくると、逆にそれもいいもので全く気にならなくなる。

山中 (建築は)小説とか、そういうものすごく近いようなところであると思うんだよね。ある種の、ひとつの固まったもの、例えば小説とか詩だとかそういったものも、文字で一応固まってるんだけど、その中に、人が読んだり、行動したりすることによって、描き出されるストーリーとかコンテクストつていうか。(…)当時はそうは思わなかった。だんだんだんだんそう思うようになってきた。

佐野 そういふ解釈を許すような広がりがあるという？

山中 あるんだろうね。それは多分、道造が若い頃に描いた夢だからつていうのもあるんじゃないかな。老境に達した建築家がつくるものと違う魅力があるんじゃないですかね。

● ヒアシンスハウスが語ること

吉里 (長くハウスガイドをしてきて、今思うのはどうのこのうのと説明するよりも、この家(ヒアシンスハウス)に入つてその雰囲気を感じてもらうつていうか。自分自身も、ぼんやりして心の良いつていうか、それを感じるから。

中島 ふわつとした感じが、私はすごく好きです。

北原 居心地がいいところですね、風が吹いてきますね、ああ窓もたくさんあつて明るくていいですね、そういう住環境を、もう少しね、みんなが考えた方がいいと思うんだよ。コンクリの中でアルミサッシと暖房使つて、全く途絶えた中の人の暮らしというのはね、これは精神的に良くないんじゃないか今思うと。本来の意味において人が住むということはどういうことかつていうのをね、ここに来た人はね、少なからず考えつてると思う。やつぱりね、自然と人間との関係だと思つたよね。

永峰 場所性となね。あの小さな中に色々な工夫を凝らしましたからね。

坂本 まあ、ひとつの文化的な価値の高いものですから、これもまた陳腐な表現だけど、なるべく長く、存続してほしいよね。(笑)

(さの・さとし 建築家)

ヒアシンスハウス・夢のひろがり

北原立木

ヒアシンスハウスが建てられて十五年になる。外壁の杉板は色褪せはしたものの、それが風格がでて来たといえればいいではないか。要は訪れる人が多くなつて、それらの人たちがハウスの中でガイドと交わす会話や建物の内部を子細にそれでいて懐かしそうな視線を遣る人のなんと多くなつたことか。それはうれしいことで恒例のヒアシンスハウス夢まつりイン別所沼が勢いづいて来ているのは確かなのだ。

去年の十一月十一日、ロープアート作家の吉田佑子が色とりどりのロープを使つて力強い表現をした。その多彩にして深い意味を想像させる作品については洞察力の鋭い詩人の田中美千代が想像力を駆使して、本「風の詩」十二号に手堅く述べているからそれに委ねたい。今年の田中美千代はヒアシンスハウスの中から外の景色やそれとの内部の調和など立原道造と同化することなか得られるといった話をすると思われる。

去年の「朗読」は中尾敏康、野口久枝が独特の視点で「立原道造」に対してのそれぞれの視点で述べられた印象がある。「合唱」は浦和高校OBの合唱団「ル・テール」で、その力強い歌声が心をふるわせた。その要望にこたえて今年も十月十三日(日)、その声と力を精一杯發揮するというのだからなんと頼もしい限りである。是非十五回「ヒアシンスハウス夢まつりイン別所沼」という集いに参加されますようご案内します。また今年には特に映像をとり入れ別所沼の四季の移ろいやヒアシンスハウスを撮られた映像作家の富田宏の作品に注目している。また建築家の佐野哲史はヒアシンスハウス十五年の歴史を独自の視点でみつめようと努めているのでその発表も期待している。

こうして見てくると、詩人の夢の継承としてのヒアシンスハウスの運営が、ここにきて、新しい展開、それは夢のひろがりというテーマへと移つて来たのが明確になって来たのではないかな。それがなんともうれしいのである。

(きたはらたちき 会長・小説家)

ハウスガイドの「はなしの種」

三浦清史

ヒアシンスハウスが出来たばかりの頃、ハウスガイドを始めのボランティアのための養成講座というものがあつた。今年の夢まつりでは、十五年ぶりにヒアシンスハウスの前でそれを復活させようということになった。

しかし、ベテランのボランティアになると建築家チーム顔負けのガイドぶりである。だから立原道造が設計したこの建物の概要は、ハウス内に掲示してある津村泰範さんの解説にまかせることにして、当日は来室者との会話を楽しむための「はなしの種」をいくつか紹介するつもりでいる。そのプロローグ気分ではヒアシンスハウスの特徴について、「風の詩」にも私感を書き残しておきたい。

来られた方の多くが、室内に入るとその居心地のよさを褒めて下さるが、立原道造の卒業論文「方法論」には「住心地よい」という言葉がある。そこでは、建築体験には「つかう」と「眺める」体験、そして「つかう」と「つくる」体験があると、「住みよい」「住み心地よい」という二つの概念を示している。この多分に思弁的で難解な論文から、「住みよさ」を目的に即した実用性、そして生命をまもる機能や性能が完備されていること、「住み心地よさ」を生活芸術の一面としての優しさや創造的な激しさを持っていること、ぼくは短絡的にそう解釈したのだが、改めて来室者が抱く感想を思えば、それも「方法論」の中にある「住み心地よさ」が具現されているという特徴からなのだろうと思う。

そしてもう一つの特徴がモダニズムの理念からデザインされた建築だということである。

モダニズムを「建築大辞典」で引くと、「近代主義。一般的には、既成の価値や秩序に基づく世界に抗して、近代科学や合理主義に基づく新たな世界を支持しようとする姿勢をいうが、(中略)、建築の上では、ウィーン・ゼツェンション、パウハウス、CIAMなどの活動を経て、国際様式が確立されてくるモダンムーブメント(近代運動)の流れ(後略)」と説明されている。ヒアシンスハウスにはコルビジエのマニフェスト(近代

建築五原則)に則った横長の窓があり、軸組を隠す大壁の構法による自由な立面がある。そして西欧の建築が鉄筋コンクリートの発明で手に入れたコーナー窓もある。そうした独創とテクニクで彩られ、同時にだれもが居心地のよさを感じる室内を持つこの小屋は、紛れもなくモダニズムの建築である。

そのモダニズムの中にあつた、住宅を住むための機械とまで言い切ったコルビジエの流れと、中世のグロッセバウを理想化し総合芸術を目指したグロピウスのパウハウスの流れ、それらの本質を同時代に嗅ぎ分けて、「住みやすさ」と「住み心地のよさ」と表現していた道造の嗅覚には改めて舌を巻く。

さて夢まつりだ。建築談義のネタモトなのだから、いささかニツチなオタクバナシになってしまうかもしれない。

以下、その目次(コンテンツ)を羅列して、乞うご期待というところで、パソコンを閉じることにしよう。

「内開きのドア」、「堀商店の錠前」、「身の丈の小屋」、「風信子荘を訪れて不思議に思うこと」、「これらは「風の詩」に載せていただいたことがある話ばかりだが、現物を目の当たりに説明できれば、拙い文章では伝えきれなかったことを、多量なりとも挽回できるかもしれないと思惑があるのだが、これだけはいかにも手抜きである。

だからコーナー窓と横長窓、そして覗き穴のような小窓、これら三つの窓のこともつけ加えよう。となると、当然アントン・レイモンドに做ったディテールについても話したくなる。その窓に嵌め込まれた硝子にはわずかな歪みがあつて時代の趣を醸しだしているが、それは解体された古建築から譲り受けた硝子だからである。そんな材料の話にまで及ぶのならば、外壁の杉板の張り方にも、天井のテックスのことも触れておきたい。それなら間取りのことだって、なぜトイレが北側に半分突き出しているのか……。

さて、当日は本当に一時間で案内し終わるのだろうか。なんだか急に心配になってきた。

(みうら・きよふみ 建築家)

ロープアートの魅力

田中美千代

日本で唯一人のロープアート造形作家吉田佑子氏の作品に私が初めて触れたのは、第十四回ヒアシンスハウス夢まつりの開催会場である別所沼会館ホールだった。

赤い漁網が壁一面に張られ、白くて長いロープ、そのロープと綴り合された赤と青の漁網、短く切られた竹筒。それらが天井から吊り下げられ、床に波打ち、左右に曲線を描いて渡されていた。ホールのコーナーを利用したそこは、まさに異界への入り口だった。

立原道造の命が発したメッセージを造形したというそれは、言葉や絵画、映像では表現できない、空間を巻き込んだ立体芸術だった。

白、赤、青というトリコロールの色彩は、洗練された道造の清々しい世界を想像させた。漁網の持つ強く繊細な線と網目の精巧な幾何学的配列は、吊るされた無数のロープの直線と相まつて一定のリズムを生み出し、ある意味完璧な強さを持つ道造のソネットとも重なるものを感じた。白と赤、白と青のそれぞれで太く纏られたロープは動脈・静脈、躍動する命の表現とも思えてくるのだから、具象を持って表現される抽象の、想像力を引き出す見事な力を思わずにはいられなかった。

「循環という長い時間を表現できる素材として、繫げれば地球を何周でも巻くことのできるロープを選んだ」という吉田氏は、「ロープには暖かい自然の良さがあつて、何と組み合わせてもそれらの物を生かすのです。あらゆる命の輝きを表現したいのです。」と無限の美の追求を語る。それは常に光に向かい、最期まで新しい文学的境地を求めて前進した道造の精神と一致する。

吉田佑子氏と立原道造の世界には元からの相通する芸術的共振があるかのように思えた。繊細で大胆、かつ氣品を放つた作品は夢まつり終了とともに解体され、今は永遠の時間の中で、夢のごとく存在する。

(たなか・みちよ 詩人)

ペンの代わりに映像で

富田 宏

よもや私にこのような風流ある文集誌に投稿の依頼があるとは、正直夢にも思いませんでした。恥ずかしながら詩歌に嗜んできたこともなく、そもそもペンを執ることを苦手にしてきました。北原立木先生からの依頼文に「内容は思いのままに」とありましたので、別所沼との縁を紹介させて頂き

ます。
昨年の正月に月刊武州路を知人から贈られて、初めて目にしたヒアシンス通信の連載記事に興味を惹かれました。「立原道造がもしひょうこり現れたら、道造が考えた通りに建ててくれた人達に感謝し一緒に眺めたでしょうね」そうですね、ほんとうにこの登場人物と寄稿者の恵子さんとの会話に、私は忽ち別所沼へ行ってみたいと思いつたのです。そしてその翌朝のこと、何と雪が降りました。「神の仕業か？ 埼玉の平野地では珍しい積雪だ、どうか自分が別所沼に行き着くまで降り止まないように！」私は祈りながら車窓を見つめて、雪の降る別所沼を想像して急ぎました。この日が別所沼とお付き合いの始まりで、別所沼を撮影する第一歩のファーストシーンということになる次第であります。それから半年後、私は冬から春までの記録をDVDにして、勝手ながら北原先生宅に送りました。先生からの返信に「これまで写真での別所沼は数多く寄せられて見ているが、ビデオ動画の別所沼に新たな魅力が感じられました。どうか一年間の記録をお願いしたい」との励ましに感激してしまいました。文人・建築家の先生方に、私の映像表現が少なからず興味を持って頂けたことに「ペンが駄目なら映像で」という負け惜しみの自己弁護が出来たように思えて嬉しく思いました。気を良くした私は更に夏から秋へと撮影に通い続けることとなるのであります。そしてついに一年間、別所沼の風情をカメラに収めて私は存分に楽しんで参りました。北原先生ご夫妻の約束通り、来る十月十三日に開催されるヒアシンスまつりの会場にて、私のビデオ作品「別所沼季節の移ろい」を上映させて頂き、ペンに代わり映像でご観賞願いたく、ご来場お願い申し上げます。

(とみた・ひろし 彩の国埼玉映像連盟会長)

ヒアシンスハウスで夢が生まれる

吉里睦子

令和になってすぐの土曜日、新ガイドのSさんと北側の雨戸を開き、緑の三角旗を上げる。春の陽が枝を広げたポプラの若葉にも沼縁の高木へも降り注いでいる。
東南の雨戸を開けるとすぐに、初老の男女七人がハウスへ入って来た。「天声人語にでいたよ」という声が聞こえた。写真撮る人、雑誌や詩集を広げる人、外を眺める人と様々で、Sさんも、インフレットを手に佇んでいた。
桜の季節を過ぎても、ハウスを訪れる人の数は多い。七人と入れ替わりに若い女性二人がカメラを持って来室した。東南の雨戸を閉めてみた。暗くなったハウスに十字に切り取られた鮮やかな緑が浮かびあがった。
「ああ、こんな景色は初めて」二人は歓声をあげ、何度も角度を変えて、十字型の景色をカメラで撮っていた。
雨戸を開けると、爽やかな風がハウスを通り抜けた。今度は長身で個性的な服装の男女が静かに入って来た。男性は長髪で大きなカメラを持ち、女性は薄地の長いコートを着こなし、つるで編んだバッグを持っている。
「キャンパスみたい」の声に、男性のカメラは天井に暫く向けられた後、ドアノブや窓へ移っていく。

人形を手造りしていて、そのためのアトリエが欲しいらしい。ヒアシンスハウスの窓やドアや机やその配置から、ゆつたりと落ちついた気持ちになれる、こんな家を作りたいと思いましたが二人は言われた。長い間観て、隅々まで写真を撮って帰られた。
お昼過ぎに東京から来られた年配のご婦人が、立原の九州への最後の旅の「長崎ノート」を詳しく調べられ、一九〇ページのの本にして今秋出そうと準備していますと話された。奥様の想いをご主人が受けとめておられる。
「このノートには、今まで知らなかった立原の最後の本当の気持ちがつまっていますよ。完成したら送ります」と言われる弾んだ声を聞いて、夢の実現を思った。
小ハウスが人を呼びよせ、様々な人との出会いがある。
この日の来室者は二十人余。面白い一日だった。

(よしごと・むつこ ハウスガイドボランティア)

「ヒアシンスハウスの会」第十四期 会計報告

◎会員数(二〇一九・六・三〇現在)八六名

第十四期会計年度「会費有効期間」

二〇一八・八・一「二〇・二」

二〇一九・七・三一「八・三〇」(二ヶ月)

＜収入の部＞

前期繰越金 二、八二三、七七〇円

会費収入 四一二、〇〇〇円

さいたま市文化助成 一〇七、〇〇〇円

雑収入(絵葉書売上他) 四一、四三〇円

収入計 三、三八四、二〇〇円

＜支出の部＞

夢まつり 一二五、一二二円

印刷費 一〇八、二四〇円

送付関係費 一六、五六〇円

ハウスガイド日当(一、〇〇〇円×一三八日)

一三八、〇〇〇円

火災保険料 一〇、九八〇円

種・階段の修繕工事費 一四六、八八〇円

ポストカード印刷費 二一、七一五円

雑支出 三八、九〇二円

支出計 六〇六、三九九円

収支合計 二、七七七、八一円

次期繰越金 二、七七七、八一円

※第十五期会計年度「会費有効期間」

二〇一九・八・一「二〇・二」

二〇二〇・七・三一「八・三一」(二ヶ月)

(会計担当 佐野哲史)

【編集後記】

第一号から第十一号まで、精緻で上質な編集を貰って頂いた高橋博夫様、本当に「苦労様でした。B5版8頁オフセット印刷を本号からA4版4頁インターネット印刷に変更しました。前号までの品格を極力継承しようと試みましたが、結果はご覧の通りです。玉稿に甘え、編集の甘さをお許し頂ければ幸いです。(山中彦彦)

風の詩「ヒアシンスハウスまつり資料 第十二号 定価一〇〇円

発行日 二〇一九年九月一日 / 発行人 北原立木(会長) 〒三三六-〇〇〇

〒一埼玉県さいたま市南区別所五-五-一九〇 四八(八六三)四四七四 /

ホームページ <https://haus-hyazinth.jp/infoseek.co.jp>